

# 「存知ですか？」 御園茶苑

昨年六月、特集記事「人間国宝・芹沢銈介」の取材でお会いした、西蒲田にお住いの嘉賀マツさんに、再度お話をうかがいました。九十一歳とは思えないほど、顔艶のよいおきれいな方でした。

マツさんの義母、嘉賀キヨさんが、戦前の昭和四年から戦災で焼失する昭和二十年まで十六年間、蒲田西口駅前で「御園茶苑」を経営していました。店は客数五十人くらいが入れる、欧米風の凝った造作で、壁には有名画家の油絵やデッサンが飾られ、一段高いステージには大きな蓄音機とレコードボックスが備えられ、お客のリクエストに応えジャズやタンゴ等軽音楽を演奏していました。店を通り抜ける、池のある中庭があり、古賀忠雄作の女性ブロンズ像に、夜間は照明が灯され、大きなテールでは、親しい常連客同士が歓談していました。

昭和の初期、蒲田には松竹蒲田撮影所やポリドルレコード会社があり、また馬込には文士村があり、映画、音楽関係者や多くの文

化人が蒲田周辺に住居を構えて居りました。「御園茶苑」にも、その人々や関係者が多く客として訪れていました。

まず、「御園茶苑」に通う常連客の名前を聞いて驚きました。彫刻家・詩人として日本を代表する高村光太郎、同じく彫刻家の古賀忠雄、小説家の丹羽文雄、火野葦平、井伏鱒二、日本画家の伊東深水等々。特に前述の芹沢銈介は住いも近く、家族ぐるみのお付き合いだわたりそうです。また、石原純という物理学者の話も出ました。

当時、日本の量子力学の第一人者だった彼が、女流歌人・原阿佐緒との恋愛で、世間の非難を浴び、東北大学教授の職を辞しましたが、渦中の二人の姿を「御園茶苑」でよく目にしたそうです。

戦災で焼け野原になった蒲田でしたが、義母・嘉賀キヨさんは駅前に、いち早く店を再開。喫茶店、レストラン、ビヤホールと次々に事業を拡大して行きましたが、駅前区画整理のため、店舗は閉鎖、あるいは移転を余儀なくされ、昭和三十九年、六十六歳でこの世を去りました。

(取材 伊藤・都築委員)

## 事務局からのお知らせ

このたび、かまにし17の編集委員の改選がありました。今期の編集委員を紹介いたします。(カッコ内、町会名)

- 委員長 都築 保二(安方南)
- 副委員長 柏村 茂(西蒲田一)  
柳通 勝彦(蒲田西口)  
山崎 修弘(東矢口一)
- 委員 石渡 咲子(西蒲田一)  
六車 泰子(西蒲田二・三)  
瀬川 二三(西蒲田二・三)  
塩田 靖敏(西蒲田四)  
前田 裕子(西蒲田四)  
勝俣 幸子(西蒲田女塚)  
伊藤多佳子(西蒲田六)  
柘植 史朗(西蒲田六)  
飯嶋 宏之(西蒲田七御園)  
下山恵美子(西蒲田七御園)  
竹内喜八郎(西蒲田八)  
多田 鉄男(御園)  
箕輪 信一(新蒲田一)  
西川 伸二(新蒲田一)  
鎌田耕一郎(道塚)  
幅 邦子(道塚)  
近藤 邦子(東矢口一)

- 星野 定義(小林)  
高橋 晴美(安方北)  
大平 義明(安方南)  
滝口 時春(多摩川二)

以上二十五名で、皆様に親しまれる、より良い情報紙を作りたいと思っております。どうぞ、よろしくお願いいたします。

また、皆様からの情報、投稿、ご意見なども、どんどんお寄せください。お待ちしております。

## 蒲田西特別出張所管内

人口	男	30,031人
	女	27,338人
	計	57,369人
世帯	30,948世帯	

平成21年8月1日現在

情報紙に対するご意見やご感想、また投稿などを事務局までお寄せください。

事務局 蒲田西特別出張所  
大田区西蒲田七十一番地  
(三七三二) 四七八五

平成21年9月1日発行

# かまにし

第33号

発行 地域力推進蒲田西地区委員会  
編集 地域情報紙編集委員会

## わがまちの顔

### 動物園シルバーガイド 金井 晃さん

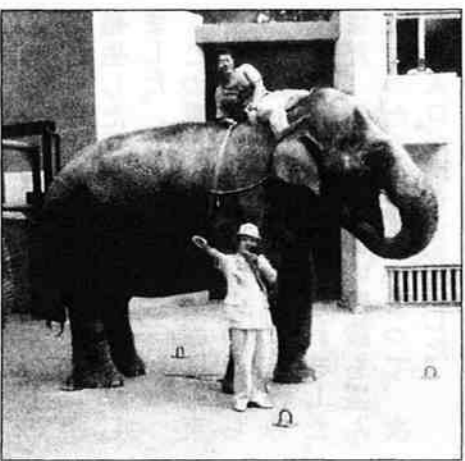
以前、上野動物園でシルバーガイドとして勤めていらした金井晃さんをお訪ねしました。

金井さんは、大正七年群馬県生まれ。二年前に奥様を亡くされ、現在は一人暮らしをされています。西蒲田一丁目の香川浴いにお住いで、九十歳には見えない若々しさです。

昭和十四年、憲兵として中国へ派遣され、戦争で多くの仲間が亡くなりましたが、金井さんは無事帰国することができました。

昭和二十五年、復員して日清製粉に勤務しました。昭和六十二年に退任するまで、「仕事には厳しく、人には優しく労う」という精神で勤務され、信頼を得ていました。その時の社長は、現在の皇后陛下美智子様のお父上でした。

金井さんが退任された頃、東京都では初めて、高齢者生き甲斐対策としてシルバーガイド事業が発足しました。金井さんは、初代のシルバーガイドとして上野動物園に着任しました。



半年間、動物に関する知識などの研修を受け、ガイドとして働き始めました。動物園の総合案内や動物についてのガイド、動物園の行事の手伝いなどを行い、徐々に上野動物園の雰囲気にも溶け込んでいきました。沢山の人や子供たちとの出会いを重ねていくうち、だんだんと仕事にも自信を持っていき、子供たちの喜ぶ顔を見ることが喜びとなりました。

金井さんは、この最後のボランティア活動を通して、人としての生命の尊さ、生きることの素晴らしさを発見したのです。

平成元年に健康のため、好きだったタバコをピタッと止めましたが、平成十年に肺がんを患い、手術をしました。手術から十年経った今でも、病気に負けてたまるかという強い信条を持って過ごしています。

手術後は、なかなか動物園に出向くことが出来ませんが、近所の幼稚園へ動物園の葉を持って行き、子供たちに動物の話をしたり、質問に答えたりという活動を続け、動物園の楽しさを子供たちに伝えてきました。

現在もまだ、人の心を和ませることを忘れられず、話があればシルバーガイドに出たいと願いながら日々を送っています。

金井さんの若さの秘訣は「自分の心を大切にすることです。」と、かくしゃくとおっしゃっていました。

最後に金井さんの詠まれた一句

すばらしい

老後の人生たまわり

我が幸せ独り占めせず

私共も生命を大切にし、生き甲斐を見つけて、素晴らしい老後を過ごしたいものです。

(取材 柏村・石渡・塩田委員)

# 特集 『道塚の昔』

## はじめに

道塚の町は、大昔（今から一万年以上も前）どんな様子だったのでしょうか。

大田区の地図を開いてみると、大森駅近くの山王台地、池上本門寺のある池上台地、さらに久が原台地、亀甲山のある調布嶺町の台地があり、平地より一段と高くなっていることがわかります。

これらの台地は、関東平野の武蔵野台地南端にあたる所で、海拔十メートル以上の台地が続いています。台地の端からは貝塚が多く発見されていて、中でも最もよく知られているのが大森貝塚です。

大昔、海の底であったこの一帯も、度重なる多摩川の洪水で上流から運ばれる土砂の堆積によって、次第に平地になったものと推測されます。

## 地名の由来

新編武蔵風土記稿（江戸時代中期に編纂）には、「道塚村は

郡の南、多摩川の果て、鎌倉街道沿いにあり、小鳥塚または独鈷塚と呼ばれる塚があった」と記されています。独鈷（どっこ）とは、密教の修行に用いる仏具の一種で、中央に握り部分があり、両端がとがって杵型をしている道具のことです。小鳥塚あるいは独鈷塚は、触ると祟りがあるととも伝えられていました。

街道沿いに塚があったことからこの一帯が道塚と呼ばれ、また三つの塚があったことから三塚、それが道塚に変化したという説もあります。

開村の時期は不明ですが、すでに江戸時代初期に編纂された武蔵田園簿には、荏原郡道塚村の文字が記されています。

## 明治以降の道塚

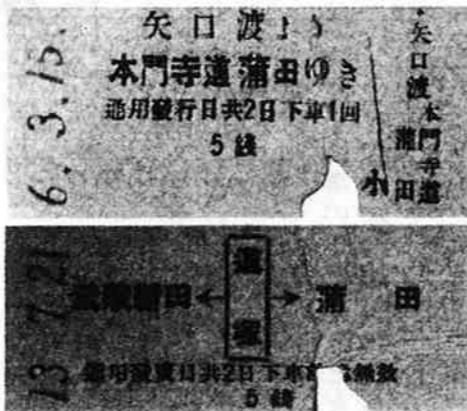
明治二十二年に矢口村に編入され大字道塚となりました。

大正十二年九月一日午前十一時五十分に関東大震災が起りました。道塚は当時は純農村地帯だったので、東京市のよ

うな大きな被害はなかったものの、道路が壊れ田畑に地割れが発生したり、土手が崩れたりしました。

この震災により、道塚にも東京や横浜方面から沢山の人が避難してきて、そのまま住み着いた例も数多く見られました。また、折から工場の開設も盛んになったこととあいまって、次第に人口が増えてきました。

その後、昭和七年に蒲田区道塚町、戦後昭和二十二年より大田区に属し、さらに昭和四十二年の町名変更で、この地は新蒲田二、三丁目となり、道塚の地名は現在では小学校や幼稚園などに、僅かに名を留めるに至っています。



当時の切符

なお、道塚の名で忘れてはならないのが道塚駅です。本紙で既に紹介されているとおり、かつて目蒲線に本門寺道駅という名称の駅があり、その後少し位置を変え道塚駅と改称され、戦後昭和二十一年廃止になるまで存在していました。現在の地図上では、東急多摩川線が環八と交差する付近ですが、実はこの地は当時の小林町であったことを付け加えておきます。

## 道塚の学校のはじまり

道塚地区には二つのお寺があります。本紙二十八号で縁起等詳細に記されており、その一つが、玉川八十八カ所霊場のうちの第六十五番札所である金剛院ならびに第六十七番札所である大楽寺です。

ここでは道塚の子供たちの教育にまつわる事柄をご紹介します。

明治六年に中山ムメという人が東京府の許可を得て、大楽寺を借りて寺子屋（塾）を開設しました。科目は筆道（今の習字）で、暮らしに必要な読み書きを主に教えており、月謝は一銭とお米五合でした。お金の他に

米というのも、まさに当時が偲ばれます。この寺子屋には数十人の子供が通っていたようです。



大楽寺

今度は道塚、原、小林、安方、蓮沼、五ヶ村の戸長、後藤慶太郎さんが中心になって薫泉分校をつくり、金剛院を借りて開校しました。

この分校が後に小林三五〇番地の明林学校となり、さらに安方三二三番地（今の矢口東小の東側）に五教室を増して移設し矢口小学校として開校しました。道塚の子供たちは、昭和十三年に道塚小学校ができるまで、この小学校に通っていました。

## 道塚小学校の誕生

前に触れましたが関東大震災後、矢口村の人口が急増してきたため、道塚にも学校の誕生が望まれていました。昭和十一年八月頃、矢口小学校から少し離れた土地を探し始め、「おぼけ屋敷」といわれていた今の学校付近に決まりました。

この土地は広い屋敷跡（中務利平さん所有）で、大きな池もあり、手を入れないので大木や茅、雑草が生い茂り、はじめにしていて昼でも暗く、腕白小僧たちも一人では心細くて、うっかり中に入ることができない所だったそうです。

この土地に昭和十二年六月十



道塚小学校に建つ石碑

五日、東京府から道塚小学校の建設が許可されました。そして翌昭和十三年五月三十日に台風にもびくともしない、F字型の二階建て二十四教室が出来あがり、六月十日に二階三教室（打抜教室）で開校式が行われました。五年生以下の子供たちが、矢口小、矢口東小、相生小、西六郷小から合せて八百名も移ってきました。

## 道塚行進曲

初代の瓜生茂校長が作詞した「道塚行進曲」の石碑が正門を入って左側に建てられています。紫匂う武蔵野の東にかすむ蒲田区にいらかほ高くそびえ立つこれぞ我らの道塚校

二 流れも清き多摩川の強き心を友として正しき道に進み行くはげめ我らの道塚校  
三 西に仰ぐは富士の峰純潔きよき優しく姿こそ我らの進む目じるしぞ振るへ我らの道塚校

この歌は、今でも折に触れ、歌い継がれています。

## 道塚神社

祖先が日月宮を建立したのが起源と言われています。天保二年、天祖神社と改め、天照大神を祀り、大正三年に、付近の油稻荷大明神、神明宮、熊野大権現、茅場稻荷大明神を合祀し、道塚神社と改めました。

昭和十二年、社殿を新築。昭和二十年四月に戦災により神社建造物は破壊しました。

昭和三十四年、社殿の全工事が完了しました。（神社建設記念碑より）

参考文献  
『大田区地名考』  
『東京の地名由来辞典』  
『大田区の神社』  
『文集戦禍と青春』